角倉素庵『和歌短冊（雨中鶯）』の再出現

林　　進

1　信多純一先生より頂いた『和歌短冊（雨中鶯）』

江戸初期、京で活躍した実業家で思想家、能書の角倉素庵（通称与一、1571～1632）が平生、漢詩や和歌を創作していたこと、また倭歌（古歌）をよく吟じていたことは、寛永10年（1633）４月に建立された木造碑『儒学教授兼両河転運使吉田子元（素庵）行状』（堀杏庵撰文、嵐山・千光寺大悲閣蔵）に「倦則吟倭歌（倦めば則ち倭歌を吟じ）而暢性情」「平日著述文章詩賦議論和歌数十巻、顔曰期遠集（顔して期遠集という）」と刻されていることから知られる。大和文華館特別展図録『角倉素庵』（2002年）にその全文の翻刻が掲載されている。

図１　素庵和歌短冊　玄之（素庵）筆

図２　和歌短冊　素庵筆　同短冊本紙の裏面に覚書き「角蔵与一殿」（別筆）がある。

わたしは素庵が自作の歌を揮毫した「和歌短冊」を長い間、探し求めた。素庵が詠んだ和歌の特徴と趣向、素庵の確かな「平仮名書体」を知りたかったからだ。それは「嵯峨本書体」（古活字版と整版）の基礎研究に必要不可欠な資料である。東京、関西の古典籍商や古美術商を尋ね、また書肆が発行する「古典籍目録」にそれを求めたが、見出すことはできなかった。

令和２年の初夏、今まで蒐集した素庵筆の和歌や漢詩の短冊、色紙、巻子や謡本の断簡、また素庵と親交のあった親王、公卿、連歌師、町衆の和歌や発句資料などのささやかなコレクションを整理しているとき、十五年ほど前に（故）信多純一先生（日本近世文学、大阪大学名誉教授、1931～2018）より頂いた『和歌短冊（雨中鶯）』（図１）が出てきた。

信多先生は「これは最近入手した和歌短冊だが、素庵が自作の歌を揮毫した短冊と思うが、君はどう考えるか」と云われ、わたしにその研究を託された。当時のわたしにはそれを判断する能力も自信もなかった。その短冊の真実を認識できなかったのだ。そのうちに、その短冊を段ボール箱の底に仕舞ったことすら、すっかり忘れていたのである。

2　素庵が揮毫した自作の『和歌短冊（雨中鶯）』

『和歌短冊（雨中鶯）』（図１）の法量は縦35·2糎、横5·2糎。本紙は楮紙で、刷毛でもって柿渋を横に軽く刷いた料紙（全紙）を短冊型に裁断したものである。柿渋による筋引きの料紙は、江戸初期の短冊の料紙としてはきわめて異例である。なお、当時の短冊は「打曇り（雲紙ともいう）」（藍の漉き染めで紙の天地を雲形に漉き上げる法）の料紙が一般的である。紙質はおおむね「鳥の子紙」（雁皮紙）である。

短冊の上部中央に「雨中鶯」と歌題を記し、「春雨にぬれて木傳ふ鶯は／むめの花笠きつゝなくらん」と和歌の〈上の句〉と〈下の句〉を二行に分けて書き、左下に「玄之」と小さく署

名する。和歌短冊の正式の書き方に準じて染筆されている。「玄之」は「はるゆき」と読み、素庵の諱（いみな）である。全体に自然な筆跡を示しているので、吉田玄之（素庵）の自筆と見て差支えない。この鑑識に至るまで長い時間を要した。

歌意は「春雨に濡れて梅の木や枝を伝え渡る鶯は、《梅の花笠》（梅の花を鶯が縫った笠に見立てた表現）を着（つ）け鳴いているのだろうか」である。「むめの花笠」の言葉は、『古今集』巻二十・1081番の「神遊（かみあそ）び歌」の「青柳を片糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」に典拠がある。また「梅」「春雨」「雨にぬれて」「きつゝ」「鶯」「花」「笠」の言葉は、藤原定家天福二年書写本系『伊勢物語』第百二十一段の「昔、梅壺（うめつぼ）より雨に濡れて人のまかり出づるを見て／うぐいすの花を縫ふてふ笠もがな濡るめる人に着せて帰さん（略）」に依拠している。春雨に濡れて梅の小枝を飛び渡る鶯の軽やかな動き、静かに降る細かい春雨に喜ぶ鶯の囀り、あちこちで梅の花笠を被る鶯の可愛い姿。古歌の世界を再現する自然な詠みに、素庵の歌の特色がうかがわれる。素庵が古歌や古典文学に造詣が深いことを示す。

和歌本文は二字と三字の連綿体で「春雨に、ぬれて、木傳ふ、鶯は、むめの、花笠、なくら、ん」と書き、文字の大小、肥瘦を誇張せず同じ筆致で淡々と流れるように染筆している。その書体は素庵が刊行した「嵯峨本」の活字書体の特徴と共通する。

3　素庵の装飾料紙

素庵は人から古歌の染筆を依頼されたとき、「木版雲母刷（もくはんきらず）り料紙」、「金銀泥下絵料紙」、「彩色下絵料紙」などの美しい装飾料紙に揮毫している。紙質は雁皮紙（がんぴし）である。普通、依頼者は十枚、二十枚の装飾料紙（短冊、色紙）を前もって用意して、能書家に届けて置く。

たとえば、『阡陵』第60号（2010年３月）所収の拙論「角倉素庵書写の観世流謡本『三井寺』切」で紹介した素庵染筆の基準作『和歌短冊』（『新古今集』二條院讃岐「世にふるはくるしきものを槇の屋に／やすくもすぐる初時雨かな」、図２）には「金銀泥水辺の景下絵」の装飾料紙が使われている。この短冊の本紙裏には直に染筆依頼者による覚書き「角蔵与一（すみのくらよいち）殿」が小さく墨書されている。現在、短冊本紙は二枚に相剥（あいぎ）ぎされ、覚書きの文字を切り取り、裏面右下隅に貼られている。この覚書きの存在がこの『和歌短冊』の筆者が「角蔵与一」であることを証明しているのだ。

図３　素庵和歌懐紙　（伝）素庵筆

素庵『和歌短冊（雨中鶯）』の柿渋引き料紙は装飾として地味なものであるが、繊細な濃淡の細線はあたかも「春雨」をイメージさせ、絶妙である。

4　素庵の『和歌懐紙』

大和文華館の特別展『角倉素庵』（2002年）に出陳された源玄之（素庵）筆『和歌懐紙』一幅（図３）は、嵯峨角倉家末裔の吉田周平氏の家に伝来したものである。最初に「詠早春和歌／源玄之」と書き、「春くればこゝろの／色のまづ染めて／木々にさきだつ花／の面影」と揮毫する。本紙（縦26･7糎、横37･3糎）は「絹本」である。「懐紙」は字の通り、「紙本」でなければならないので、この掛幅は「素庵和歌懐紙」の後世の「写し」と考えられる。

昭和10年（1935）11月に恩賜京都博物館（現・京都国立博物館）で開催された「本阿弥光悦展」の出陳目録に「108番、詠早春和歌（素庵筆、端に　詠早春和歌　源玄之）、一幅、京都市、角倉マサ（満智〈マチ〉の誤植）氏蔵」とある。吉田氏にそのことを尋ねると、満智は明治のはじめに茶道の家元、裏千家より養女として二条角倉家に迎え入れられた方だという。吉田氏によれば、吉田家本と角倉満智本とは別ものであるという。現在、角倉満智本は不明であり、素庵自筆かどうかを明らかにすることはできない。

元・大和文華館学芸員、現・大手前大学非常勤講師